

天井裏からどうぞよろしく2

目次

第五章	甘い菓子をどうぞよろしく	109	87	58	34	7	第一章 天井裏からどうぞよろしく	第二章 手を繋いでどうぞよろしく	第三章 初めましてどうぞよろしく	第四章 にぎやかにどうぞよろしく	第五章 いつまでもどうぞよろしく	第六章 共存求めてどうぞよろしく	第七章 北の地よりどうぞよろしく	第八章 生き急がずどうぞよろしく	第九章 涙をふいてどうぞよろしく	第十章 いつまでもどうぞよろしく
-----	--------------	-----	----	----	----	---	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

登場人物紹介

▼少女の長兄

◀腰痛持ちの
密偵

▼少女の養父

先帝

皇帝の父親で、一小国を
帝国までのし上げた初代皇帝。

天井裏の密偵達

皇帝執務室の天井裏で
諜報活動を行う中高年達。

宰相

皇帝の二歳年上の叔父。
冷静沈着で少し皮肉屋。

皇太后

皇帝の母親。先帝と共に
北の連邦国に
引きこもっていたが…

少女の幼馴染

少女の元密偵仲間。現在は
帝国に出向して侍女に。

少女のお供
ボスネコ

皇帝 (24歳)

多くの属国を従える帝国の
統治者。文武に優れ、霸者たる
威厳も備えるが、少女には激甘。

少女のお供
トグマ

少女 (18歳)

元は帝国の属国から派遣された
密偵。皇帝陛下に見初められ、
もうすぐ皇妃になる予定。

第一章 天井裏からどうぞよろしく

「……さて」

天高く伸びる大木の袂たもと。低い声でそう呟つぶやいて、腕組みをしたのは若い男だった。
黒い髪と琥珀色こはくいろの瞳をした美丈夫で、その長身には豪奢な衣服ごうしやを纏まつっている。

「あ、あの……」

「うー……」

男の前には、一人の少女と一匹のクマの子供が並んで立っていた。

栗色の髪をした愛らしい顔立ちの少女は、翡翠色ひすいいろの瞳でおずおずと男を見上げる。

彼女の腰ほどもあるメスの子グマは、くりくりとした黒い目で男と少女を見比べている。

男は難しい顔をしてそんな少女と子グマを見下ろしていたが、やがて大きく一つため息をついた。
そして、胸の前で組んでいた腕を解いて、少女の方へと片手を伸ばした――

かつて、その大陸には多くの小国が乱立し、日々小競り合いを繰り返していた。

戦争が慢性化し、顧みられぬ民は疲れ果て、どの国も確実に滅びへの道を歩んでいた。

そんな情勢の中、突如として台頭してきた国があつた。

それは比較的歴史の浅い新興国家であつたが、抜群の統率力とカリスマ性を誇る君主が自ら軍を率いていた。君主は混沌とした大陸を駆け巡り、その勢いを止められる者はおらず、次々と周辺諸国を制圧して領土を広げた彼の国は、やがて“帝国”を名乗るようになつた。

そして、今から八年前、ついに大陸中の国々を巻き込んで、一際大きな戦争が起ころ。

当時、帝国はすでに三十余りの属国を従えていたのだが、その脅威に焦つたいくつもの古い小国が結託し、帝国に対しても宣戦布告をしたのだ。

戦に巻き込まれ、人々は傷つき家を失い、多くの悲劇が起つた。

だが、帝国は無抵抗な相手には寛大だつた。そのため、私利私欲に塗れた自国の王侯貴族を早々と見限る民も少くはなかつた。

そもそも、即席で結成された連合軍などが、鉄の団結を誇る帝国軍にかなうはずもない。

帝国は連合軍を完膚無きまでに叩き潰し、さらに二十餘りの国を傘下に収めた。

そうして帝国が大陸一大きな国家となつた四年前、ようやく戦の時代は終わつたのだった。

そして現在、その帝国にある王城の庭。

少女の明るい栗色の髪に、男の手が触れる。

眉を八の字にした少女は彼を上目遣いに見上げ、口を開いた。

「へ、陛下……」

この男こそが、五十余りの属国を抱える大帝国の皇帝陛下だつた——ただし二代目の。

軍を率いて大陸中を駆け巡り、祖国を巨大な国家へと仕立て上げたのは、彼の父親であつた。

その後、初代帝国皇帝となつた父親は、大戦の終結とともに玉座を一人息子にあつさりと譲つたのだった。

齡二十で大帝国を任された現帝国皇帝は、戦に明け暮れた父親とは打って代わつて、政に重きを置いた。

彼の意向により、属国の統治は帝国から派遣した総督の指揮のもと、それぞれの元王家及び国民の代表の手に委ねられることになった。すなわち各固有の宗教や法制度、生活習慣の保持を許し、自治を認めたのだ。そんな帝国の平和的な支配に、各属国はひとまず胸を撫で下ろした。

しかし同時に彼らは——特に、大戦後に傘下に入った新参国は、新しい皇帝陛下の力量を計りかねていた。強烈なカリスマ性により一小国の王からのし上がつた初代皇帝に比べ、新皇帝は突然祭り上げられた感が否めない。それに、何しろまだ若かつた。

そのため、彼の動向を探ろうと、各属国の諜報部は優秀な密偵を帝国の王城に潜入させていた。

そして今、帝国皇帝陛下の前で縮こまつている少女もまた、そんな密偵の内の一人だつた。

密偵の彼女が、監視対象であるはずの皇帝陛下と、明るい陽の光の下で向かい合つて立つてゐる。これは、普通に考えれば由々しき事態であつた。

敵国に捕えられた密偵の末路と言えば、厳しい取り調べや拷問——最悪口封じのために処刑、と相場が決まつてゐる。少女は翡翠色の瞳でおどおどと皇帝を見上げ、髪に触れてくる彼の手に身を

竦めた。

しかし、皇帝には彼女を捕えようとする様子も、手荒く扱う気配もない。それどころか、少女の髪を優しく撫で、まるで慈しむように指先で梳いた。

皇帝は琥珀色の目を細め、小さくため息をついて告げる。

「我が妃は、随分とお転婆のようだ」

「も、申し訳ありませんでした、陛下……」

実は少女は、一属国の密偵でありながら帝國皇帝陛下に見初められ、間もなく彼の妻——大帝國の皇妃となることが決まっているのだつた。

彼女の栗色の髪には、木の葉が絡んでいた。それを、皇帝が丁寧な仕草で一つ一つ取り除く。少女と並んで立つていた子グマの黒い毛にも、木の葉がたくさんくつついていた。子グマはそれを気にすることもなく少女の身体をよじ登ろうとするが、突然その鼻先を何かがシュッと掠めた。

「——キヤン！」

甲高い悲鳴を上げて、子グマが少女の身体から離れる。そして、鼻先を両手で押さえて地面上の上を転がり回った。

「なーおっ」

そんな子グマを、皇帝と同じ琥珀色の瞳で冷たく見据えて低く鳴いたのは、黒い毛並みのネコだつた。ネコにしては大柄な体格で、威風堂々とした姿には貫禄もある。

黒ネコはオスで、ここ——皇妃の宮で飼われている、総勢二十四のネコ達を纏めるボスである。

さらに彼は、親を亡くして王城で育てられることになった子グマの父親役をも担っていた。

「ボス、あまり怒らないであげて」

子グマの鼻先を鋭い爪で引っ搔いて教育的指導をした黒ネコに、少女はそう声をかける。

すかさず頭上から、コホンと咳払いが降つてきた。

少女は自分の置かれた状況を思い出し、慌てて皇帝に向き直る。そして、両手をもじもじとさせながら、もう一度「申し訳ありませんでした」と謝つた。

「陛下のお手を煩わせるつもりはなかつたんです。木登りは……その、得意なので……」

少女はつい先ほど、皇妃の宮の庭に生えた大木へと登つた。

とはいえ彼女だつて、何も好きでそうしたわけではない。先に木に登つたのは、今は少女の足もとに座つて引っ搔かれた鼻先を舐めている子グマ。

どうやら子グマは高く登り過ぎてしまつたらしく、枝にしがみついてきゅんきゅんと鳴いていたのだ。

少女はいの一番にそれに気づき、慌てて助けに向かつた。密偵として幼い頃から訓練を受けていた自分にとつて、木登りなどお手のものだと。ところが……

「だが、子グマを抱えて降りなければならることは想定していなかつたと？」
「め、面目ありません……」

いざ子グマのもとまで辿りついたはいいものの、今度はその子グマを抱えて降りなければならぬ。しかし、そろそろ一歳を迎える子グマの身体は、少女が背負うには大きく、また重すぎた。

そこへちょうど、午後のお茶の時間を皇妃の宮で過ごそうと、皇帝がやつてきた。

大木の上で黒い毛玉を背中にくつつける危なつかしい少女の姿を見つけて、彼が肝きもを冷やしたのは言うまでもない。

皇帝は木の袂たもとでおろおろする近衛このえ兵や侍女達を押し退けて、自らそれによじ登った。

そして、少女の背中から子グマを引き剥がし、代わりに自分が背負つて木を降りたのだつた。

少女はその時のことと思い返し、後悔した。皇帝の手を煩わずらわせてしまつたこともいけなかつたが、そもそも自分が木に登つてしまつたのが失敗だつた。

少女が元属国の密偵であると知つているのは、ほんの一握りの者達だけなのだ。

日頃皇妃の宮で一緒に過ごす侍女達や、周囲を警備する近衛兵達は、彼女の正体を知らない。

大帝国の皇妃になろうという娘がひよいひよいと木によじ登つたことに、彼らはさぞ驚いたことだらう。何より、少女の警護になんでいる近衛兵達の立場がない。

少女は、困つた顔をしていた近衛兵や、心配そうに見守つていた侍女達に向き直つた。

「軽卒な真似をして、申し訳ありませんでした」

皇妃となる少女にそう言つて頭を下げられ、近衛兵や侍女達は顔を見合わせる。

「いいえ、我々がもつと早く木に登つてきえいれば……」

「私達が、子グマの行動にもつと注意しておけば……」

彼らは口々にそう言い、「ともかく、妃殿下がご無事で何よりです」と領き合つた。そして、最後に口を開えて告げる。



「陛下が来てくださつて、本当にようございました」

近衛兵このえいも侍女達も、寄り添つて立つ皇帝と少女にほつとしたような顔を向ける。

皇帝はそんな彼らの様子に満足げに頷くと、再び少女に向かつて口を開いた。

「手を見せてみろ」

「は、はい」

命じられるまま、少女は両手を差し出した。

密偵を務めていた少女の手は、蝶よ花ちょうかよど育てられた貴族の姫君達の白魚しらうおのよだな手とは違う。しかし、日に焼けてはおらず華奢きやしやだった。

皇帝はそんな少女の掌てのひらを眺めていたが、ふと大きく眉をひそめた。

「傷だらけではないか」

「え……？」

皇帝の指摘通り、少女の掌や指の腹には小さな擦り傷がいくつもできていた。

先ほど登った木は幹が堅く、樹皮が剥がれたりさざくれ立つている部分も多かつたせいだろう。指の付け根にはマメもでき、その内のいくつかは今にも潰れそう。自覚がなかつた少女は、それを見て目を丸くする。

しかしすぐにはつとしたような顔になつて、皇帝の手を取つた。そして、その掌をまじまじと眺める。

「……あれ？」

少女は、皇帝の手にも同様に傷ができるではと心配になつたのだ。
ところが実際は、擦り傷もマメもできていなかつた。

少女は自分のものよりもずっと大きい掌を撫なででて首を傾げる。

皇帝は、そんな彼女の仕草に目を細めつつ口を開いた。

「何も、昔からパンばかり握っていたわけではないからな。お前の手の皮よりは厚いぞ」

今でこそ、執務室にこもって書類を睨んでいることが多い皇帝だが、幼い頃より父である先帝に鍛えられたため、武芸にも秀ひでている。剣の腕もさることながら、長弓ちょうきゅうの名手としても名高い。四年前まで続いた大戦では、先帝とともに最前線に立つていたほどだ。

皇帝のがつしりとした男らしい手が、少女の手をやんわりと握り返した。そして、そのままそれを自分の口元へと持つていくと、つられて顔を上げた少女の両目を覗き込んで告げた。

「お前は我が妃となる。この手も、私のものになるのだ。傷付けることは許さぬ」
「陛下……」

皇帝が少女に向ける眼差しはいつも優しい。だが、その目は切れ長でなかなかに鋭いのだ。
皇妃らしからぬ行動をしてしまつたと反省していた少女は、その琥珀色こはくいろの瞳に断罪されているような気持ちになつた。

「申し訳ありませんでした、陛下……」

少女は再び身を竦め、もう何度目かになる謝罪を繰り返す。
と、そこで、皇帝と向かい合つて立つ少女の背後から声がかかつた。

「彼女がお転婆^{（へんぱ）}なのは、今に始まつたことではないでしよう？ それに、陛下だつて人のことは言えないとんじやないですか？」

そう少女を擁護するような言葉を紡いだのは、皇帝とよく似た声だつた。
しょんぼりと俯いていた少女はぱつと顔を上げ、背後を振り返る。

すると、淡褐色の瞳とかち合つた。その右の眼窩には片眼鏡が嵌まつている。

「宰相様」

長い黒髪を背中に流したその人は、帝国の宰相で、先帝の年の離れた実弟——つまり、皇帝の叔父にあたる。宰相は少女の背中にくつついていた木の葉を摘み上げると、彼女の頭越しに皇帝と視線を合わせて続けた。

「帝国の皇帝陛下ともあろうお方が、近衛兵達を押しのけて自ら木に登るだなんて」「自分の妃となる娘が困つてゐるのに、指をくわえて見ていられるものか」

眉をひそめて言い返す皇帝に、彼より二つ年上の宰相はやれやれとため息をつく。

「それでも、あなたは他の者に任せるべきだつたんですよ。——ねえ、参謀長」

「宰相閣下のおつしやる通りです、陛下。私にお任せくださればよかつたのに……」

宰相の言葉に大きく頷いたのは、焦げ茶色の短い髪と青い瞳をした精悍な顔つきの男だ。

帝国軍の参謀長を務める彼は、二つ年下の皇帝とは兄弟のようにして育ち、その忠誠心は誰よりも厚い。同じく幼馴染の宰相と力を合わせ、若き帝国皇帝陛下を公私ともに支えている。

参謀長は次に少女の傍らに片膝をつくと、彼女と視線を合わせて口を開いた。

「妃殿下も。とつさに身体が動いてしまうのは分かりますが、こらえてください。ちゃんと周りの者を使つてくださいねば」

「はい……申し訳ありません、参謀長様」

「ご覧ください。皆、心配して集まつてきました」

「あつ……」

参謀長の言葉を聞いて少女が辺りを見回すと、皇妃の宮のネコ達が顔を揃えていた。普段は各々好き勝手な場所で過ごし、餌の時間くらいしか集まつてこないというのに。

「妃殿下に何かあつたら、皆悲します。私も、とても悲しいです」

「ごめんなさい……」

ネコ達の視線と参謀長の言葉に、少女は自分の軽はずみな行動を改めて猛省する。

そんな少女を見下ろし、皇帝もようやく眦^{まなざし}を緩めた。

「何はともあれ、大事がなくてよかつた」

皇帝がそう呟くと、宰相と参謀長も同意するように大きく頷いた。その表情や態度からも、二人が少女を皇妃として認め、案じてゐることが伝わつてくる。

だがそんな彼らも、かつて皇帝が少女を皇妃にすると言い出した際、最初から同意したわけではなかつた。

宰相は、彼女が皇妃という重い立場に押し潰されてしまうのではないかと心配してゐた。一方参謀長は、属国の密偵であつた少女をなかなか信用することができなかつた。

皇帝を大切に思うあまり、少女を見定めようとする彼の目はますます厳しくなり、大人げない態度を何度もとった。それでも、少女の純朴さを目の当たりにする度に心が揺らぎ、最終的には皇帝に対する彼女のまっすぐな想いを耳にして、心を許すようになったのだった。

そういうしている内に少女の無事を確認して安心したのか、ネコ達はまた庭に散つていった。

侍女や近衛兵達も、それぞれの仕事に戻る。

少し離れた場所では、黒い毛並みのボスネコが子グマの鼻先を舐めてやっていた。どうやら彼の方も説教は終わったようだ。

皇帝は少女を連れて皇妃の宮の中に戻り、宰相と参謀長もそれに続く。

皇帝は、そこで待っていた人物へと声をかけた。

「侍女頭、手当をしてやつてくれ」

「——妃殿下っ……！」

帝国の王城で働く侍女達を纏めるのが、この侍女頭である。皇帝は彼女に全幅の信頼を置いており、少女の正体も伝えていた。

侍女頭は少女の傷ついた掌を眺めると、きっと両目を吊り上げる。

「これから皇妃となるうお方が木に登るなど言語道断。もつと、ご自分の立場を弁えていただかなければ困ります」

「ご、ごご、ごめんなさいっ……」

侍女頭の厳しい叱責に少女は竦み上がり、思わず傍らの皇帝に身体を寄せる。

「ご、ごご、ごめんなさいっ……」

そんな少女の肩を抱き、皇帝は侍女頭に向かつて言つた。

「説教は私が済ませた。もう叱つてやるな」

皇帝は、自分に頼るような仕草をした少女が可愛くて仕方がないらしい。

しかし侍女頭は、そんな彼の緩んだ顔と、その背後に佇む宰相と参謀長を睨みつけ、さらに眦を吊り上げた。

「陛下のお説教など、睦言^{むつごん}と変わりないではありませんか。宰相閣下も参謀長閣下も、妃殿下に甘すぎます」

乳母として皇帝を育て、宰相と参謀長の幼少時代をも知る侍女頭の言葉には遠慮がない。

皇帝の方もそれを咎めるつもりはなく、宰相と参謀長は軽く肩を竦めて苦笑しただけだった。

「あなた様は、いずれは陛下の御子を——ゆくゆくは帝国の皇帝となられるお方を身籠る、大切な御身なのですよ。もしものことがあつてはいかがいたします」

少女は皇帝の腕の中で縮こまり、母親に叱られた幼子のようにしゅんとした。

そんな風に侍女頭のお説教が続く中——

「侍女頭のあのちよつとキツい感じ……私、嫌いじゃないんですね……」

「おや、おたくもですか。実は私も、侍女頭は結構好みのタイプなんです。叱られてみたい」

ひそひそとそんな言葉が交わされる。

ここは、皇妃の宮の天井裏。下階の天井板と上階の床板の間という窮屈な空間である。横には広

いものの、迂闊^{うかつ}に立ち上がるうものならばたちまち頭をぶつけてしまう。さらには、換気のために設けられた小窓からわずかに陽の光が差し込む以外、辺りは闇に支配されてほとんど何も見えない。

そんな決して居心地がいいとは言えない場所で、何人の人間が這いつくばっていた。

闇に溶け込む真つ黒い衣服に身を包み、頭部と顔には黒い布を巻き付けて、見えてるのはそれぞれ目元だけ。

彼らは、この帝国の王城に派遣されている密偵達。天井板に空けた小さな穴から、下の部屋にいる人々をこつそり眺めるのが仕事である。

彼らの視線の先では、皇妃となる少女に対する侍女頭の説教が続いている。

「まあまあ、侍女頭。妃殿下に大した怪我もなく、陛下もいいところを見せられたのですから、よいではありませんこと」

そう言つて近づいてきたのは、長い黒髪の美しい女性だった。

天井板の穴から彼女を見下ろした密偵が、ほうと熱のこもったため息をこぼす。先ほど侍女頭に熱い視線を注いでいたのとは、また別の者だ。

「西の公爵様は、相変わらず別嬪^{べっぴん}だなあ。再婚のご予定はないんでしょうかねえ」「死んだ亭主^{みどり主}に探^{みつ}を立てていらっしゃるのかね。だとしたら、いじらしいが……あんなに若々しいのに勿体ねえなあ……」

黒髪の女性は、女ながらに西の公爵家の当主を務めている。

帝国には、王城を中心として東西南北にそれぞれ屋敷を構える四つの公爵家があつた。

その中でも、西の公爵家は皇帝家と最も血の繋^{つな}がりの深い一族であり、先代の当主は初代皇帝の実弟——現皇帝の叔父^{おと}だつた。

しかし、彼が子を生^なさないまま四年前に急死してしまつたため、その夫人が跡を継いだのだ。

また西の公爵家の当主は代々、帝国の諜報機関^{ちょうほうきかん}を纏^{まとい}める立場にある。帝国はもちろんのこと、属国^{しゆく}の内情もつぶさに耳に入つてくるため、黒髪の女性——現西の公爵も、皇妃となる少女が元々は属国の密偵^{ひつてい}であつたことを知る、数少ない人物の内の一人であつた。

そんな西の公爵はふと、片手を庭の方に向かつて差し伸べる。すると、革の手袋に包まれたその腕に、バサリと翼^{よくばし}をはためかせて舞い降りたものがあつた。

鋭い爪と尖つた嘴を持つ猛禽類^{もうきんるい}。精悍^{せいかん}な顔つきをしたそれは、鷹狩^{たかが}りの名手である西の公爵の相棒だつた。

鷹は大人しく飼い主の腕にとまり、翼をたたむ。しかし、琥珀色^{こはくいろ}の瞳は一点を睨みつけていた。

その視線の先にいたのは、黒い毛並みのボスネコ。

黒ネコの方も、同じ色の瞳を細めてじつと鷹を睨み返している。

「鷹のやつ、なかなか意地の悪いことをしたな」

静かに火花を散らす鷹と黒ネコを眺め、密偵達が苦笑する。

彼らは皇妃の宮の人間達だけでなく、動物達のやり取りをも一部始終観察していた。

そもそも子グマが木に登つたのは、あの鷹が枝にとまつっていたからだつた。

大きな鳥の姿に好奇心をくすぐられ、目を輝かせて近づいていく子グマ。鷹はそれを嘲笑うかのように、少しづつ上へ上へと移動し、結果的には子グマが降りられなくなる高い位置まで誘導したのだ。子グマの父親代わりを務める黒ネコが腹を立てるのも当然だろう。

そんな動物達のようにならぬになることはないものの、ここ最近少女に関して意見を対立させることが多いのが、侍女頭と西の公爵である。

「妃殿下は、ご自身の技量を過信なさるきらいがござります。何かあつてからでは手遅れなのでですよ」

侍女頭は少女を心配するあまり、ついつい口煩くなってしまふ様子。

「元気があつてよいではありませんか。女の子はお転婆なくらいがちょうどいいですわ」

一方、西の公爵は少女のすべてを肯定し、大らかに見守る構え。

二人の淑女はそれぞれの方法で、少女を慈しんでいる。

とはいえ侍女頭も西の公爵も、少女が皇妃候補として王城に住まうようになつた当初は、彼女が皇帝を害しはしないかと警戒していた。一人で結託して策を巡らせ、少女の動向を探つたこともある。結果、彼らもまた少女の素直で純朴な心根を知り、すっかり魅せられてしまつたのだ。

さらには皇帝自身が少女を心から愛していること、そして「あの娘を、私の側で幸せにしたい。そのために、お前達の力も貸してほしい」と直々に頼まれたことで、侍女頭と西の公爵も、少女を支えようと心に決めた。

彼女達を味方にしたことが、少女にとつて大きな助けとなるのは間違いない。

だがそんな少女は今、件の淑女達に挟まれておろおろしている。その様子を天井裏の密偵達は微笑ましげに見守つた。その時、

「あー……いたたつ……」

と、体勢を変えようとした一人の密偵が腰を押されて呻いた。

「参つたなあ。わしももう、ここいらが潮時ですかねえ」

彼は天井裏に詰める密偵の内、一番年嵩の男だった。長年腰痛を患つていたが、最近とみにそれがひどいとぼやく。

すると隣で這いつくばつていた別の密偵が、覗き穴から目を離して口を開いた。

「いやいや、まだまだ！……と、言いたいところですが、実を言うと私も最近……」

こちらも他の密偵達同様、全身黒ずくめのがつしりとした体格の男。

密偵のキャリアとしては、腰痛持ちの男に次ぐベテランだ。彼はある属国の諜報部で幹部を務めており、祖国から帝国の王城に派遣される密偵達を束ねる立場にもある。

そして彼こそが、属国の密偵から大帝国の皇妃へと転身する少女を育てた男だった。孤児であつた少女とは血の繋がりこそないが、確かな親子の絆で結ばれていた。

そんな少女の養父も、自分の腰をどんどん叩いて「いてて」と呻いた。

四六時中窮屈な体勢を強いられる密偵にとって、腰痛は言わば職業病。

「いやあ、寄る年波には勝てませんなあ」

「まったくですなあ。若いもんに後を任せて、年寄りはそろ引退を考えないといけませんか」

ねえ

少女の養父と年嵩の密偵は、そう言い合つては切ないため息をついた。

そんな二人に、比較的若い密偵が音もなく近づいてくる。その手にはボトルが握っていた。

「おやつさん達、そんな寂しいこと言わないでくださいよー！ これ飲んで、まだまだ頑張りましょうや！」

「おや、これは？」

「最近注目されている酒精の入つてないワインもどきです。各地の品評会で本物のワインを抑えて賞を総なめにしたつて噂の逸品ですよ！」

「ほう、それはぜひ、賞味させていただこうか」

「どーぞどーぞ！」

勤務中にもかかわらず、ボトルを囲んで盛り上がり始める自由な密偵達。

そもそも少女の養父を含め、彼らの本来の持ち場は皇妃の宮ではなく、皇帝執務室の天井裏である。監視の対象は帝国で最も重要な人物、皇帝陛下その人であり、密偵として配属されているのは当然エリート中のエリートばかり。

なのに会話の内容ときたら、場末の酒場で飲んだくれている連中と変わりない。

「ちょっと、もう……あんたら……」

それに呆れた顔をしているのは、本来皇妃の宮の天井裏を担当している密偵の一人——帝国皇妃となる少女の、血の繋がらない兄だつた。少女には三人の義兄がいるが、彼はその一番上である。

長兄はやれやれとため息をつくと、盛り上がるオヤジ達から下階へと視線を移す。そして、間もなく正式に帝国皇妃となる妹の姿を眺めて、今度はしみじみとしたため息をついた。

少女の掌の傷は侍女頭が素早く手当をし、乱れていた髪も、西の公爵が櫛で整えたようだ。

少女は今、膝に抱いたボスネコの背中を撫でながら、皇帝とソファに座つてお茶を楽しんでいる。向かいのソファには、宰相と参謀長もリラックスした様子で腰掛けていた。

長兄は、無邪気な笑顔を皇帝に向ける妹を眺め、少々複雑な思いを抱いた。妹が幸せになるのは彼にとってもちろん喜ばしいことなのだが、一抹の寂しさを覚えてしまう。

「チビのヤツ……あんなに小さかったのになあ……」

長兄はそう呟くと、彼女と初めて会つた時のことを思い返した。

最北の戦場で諜報活動をしていた彼の父親が、女の赤子を連れて帰つてきたのは、今から十八年前のことだ。

当時、すでに一家は母親を亡くしていたため、赤子はそのまま男所帯で育てられる。周囲の心配をよそに赤子はすくすくと成長し、父や兄達に倣つて密偵となつた。

そして、父の見習いとして、帝国皇帝執務室の天井裏に出入りするようになつたのが二年前。

その後一年間は何ごともなく過ぎ去つたものの、一年前に突然少女の娶入りが決定。それを阻止し、自ら引き取つたのがなんと帝国皇帝陛下だつたのだ。

そもそも、帝国皇帝陛下は少女が配属される前から、密偵に扮して天井裏に出入りしていたらしい。そうして正体を隠して少女と交流を深めていくうちに、帝国皇帝陛下は一属国の密偵である彼

女を愛してしまったのだと言う。

少女の長兄としては、妹が見初められたことは誇らしく、女を見る目がある男だと皇帝を見直したものだ。

その後、半年間を皇妃候補として過ごした少女は、今から五ヶ月半ほど前に成人にあたる十八歳を迎えると同時に彼女が正式に皇妃となることが帝国の内外に発表された。

さらにこの半月後には、帝国を挙げての盛大な結婚式が予定されている。

「あのチビが、もうすぐ人妻かあ……」

少女の長兄は花嫁衣装に身を包む妹を想像し、感慨深げなため息をついた。

と、そこですぐ傍らから、ズビビッと盛大に鼻を啜る音が聞こえてきて、彼は顔を上げる。

「……って、親父さん？ 何、泣いてんの？」

「泣いてねえよ、バカヤロウ！」

彼の父——少女の養父が、いつの間にか隣に並んで下を眺めていた。

その覆面から出ている両目が潤んでいるのは、長兄の見間違いではない。

「おい、親父さん。酔つてんのか？」

「酔つてねえよ、クソつたれ！ 酔えるもんなら、酔いてえよ!!」

少女の養父はそう吼えると、片手に掴んでいたボトルをあおる。

それを見ていた密偵の一人が、ボトルを指差しガハハと笑つて言つた。

「いくら飲んでも酔えませんぜー。それ、酒精は入つてませんからねえ」

帝国の王城の中で最も大きいのは、中央に位置する建物である。

ここには、皇帝や宰相、および法務や財務といった各事務方の執務室が入つており、帝国の政策を話し合うための会議室なども設けられている。また上階には要人の私室もあり、最も人の出入りが多く、活気のある建物となつてゐる。皇妃となる少女が住まう皇妃の宮も、この建物の一角にあつた。

次に大きいのは、中央の建物に添うようにして、表門から向かつて右側に位置する建物。こちらは、総司令官や参謀長以下、軍部要人の執務室などが入つた施設である。

そして、それとは対称の位置——表門から向かつて左側に位置する建物は、賓客^{ひんきやく}のための宿泊施設になつており、貴賓宮^{きびんきゅう}と呼ばれている。貴賓宮の最上階には大規模な宴を催すための大広間があり、帝国皇帝陛下の結婚式もそこで行われる予定になつてゐる。

帝国の城は、現在これら三つの建物により構成されている。

しかし、かつてはもう一つ大きな建物——皇帝の妻となる女達が住まう後宮^{こうきゅう}が存在した。

後宮は、皇妃の宮と庭を挟んで向かい合うように立つており、少女が皇妃候補となる少し前までは、帝国の貴族や属國の王家などから差し出された女性達が皇帝の寵愛^{ちやうあい}を得ようと鎧を削つていた。ところが、現皇帝陛下は彼女達の誰一人とも関係を持とうとせず、それどころか女達を全員生家へ帰し、後宮の建物自体を取り壊して更地にしてしまつた。彼はそうすることで、少女をただ一人の妻として愛する、と周囲に宣言したのだ。

現在、後宮の跡地から裏門にかけての敷地には、大きな美術館が建設中である。

その監修を任せているのは、まだ十九歳と若い東の公爵。

彼の父親である先代の東の公爵は、大戦中、各國の芸術品保護のために奔走した人物だった。三年前に惜しまれながらこの世を去つたが、彼が収集した貴重な絵や彫刻などは、城の宝物庫に大切に保管されている。

それらを広く一般にも公開し、身分にかかわらず誰でも芸術と触れ合えるようにしたいと考えた皇帝は、その責任者として父親の芸術論を子守唄代わりに聞いて育つた東の公爵に白羽の矢を立てたのだった。

そして、若い東の公爵を補佐する形で監修に携わることになったのは、南の公爵である。城の宝物庫の管理は、現在この南の公爵が請け負っていた。

「宝物庫に入るのは初めてですか？　妃殿下」

「はい、先生」

この日、少女は南の公爵に連れられて、その宝物庫へとやってきた。

先代の南の公爵は半年ほど前、属国の反帝国勢力を焼き付けて戦争を起こそうとした咎で、流刑になつた。その遠縁であった新しい南の公爵は、派手な財力や貢禄はないものの、皇帝に対する忠誠も厚く、また皇妃となる少女の教師役をも務める博識な紳士である。

「わしも、ここに入るのは初めてだぞ、先生」

「実は、私もなんです。先生」

「おやおや、今日は生徒さんが多いですねえ」

そんな南の公爵を苦笑させたのは、帝国軍総司令官と参謀長である。

帝国軍の最高司令官は慣例により皇帝が兼任しているが、実権はこの総司令官に委ねられている。彼は先帝の側近として大帝国を築いた立役者の一人であり、参謀長にとつては実の父親でもあつた。その軍部父子が少女に同行しているのは、何も宝物庫見学のためではない。

美術館の外観が間もなく完成することを受け、皇帝の結婚式に合わせてその一部が披露されることになつた。各属国や同盟国から訪れる多くの賓客には、展示品も一部先行公開する予定である。その中には特別貴重なものもあるため、軍部が運搬と護衛を担うことになつたのだつた。

総司令官と参謀長は、今日はその下見をするために宝物庫を訪れたのである。

「とはいっても、わしは芸術に關してはからつきしなあ……」

何重にも掛けられた鍵を外す南の公爵の後ろで、総司令官がそう言つてため息をついた。

無骨な武人と高尚な芸術は、なかなか相容れぬものである。価値などさっぱり分からんとばやく総司令官に、南の公爵は笑つて言つた。

「何をおっしゃいます。帝国の英雄と名高い総司令官閣下は、目が肥えていらっしゃいましょう」「いやあ、まあ、女に関することでしたら、ちよつとばかりうるさいんですねえ」

黒々とした顎髭を撫でて、にやにやする総司令官。しかし彼は、視線を感じてふと振り返る。すると無垢な少女の瞳と蔑むような参謀長の瞳とがち合つて、びくりと身を竦ませた。

「総司令官様は、女性にお詳しいんですか？」

「ごめん、嬢ちゃん。そんな汚れない目で見ないで。おじさん、恥ずかしい」

「妃殿下のお耳にくだらない話を入れないでいただけますか、父上」

興味津々の少女に、顔を覆つてたじたじとする総司令官。そして、それを冷たい目で見つめる参謀長。そんな三人の様子に、はははと笑った南の公爵は、眼鏡を指で押し上げながら言った。

「はいはい、生徒の皆さん。鍵が開きましたよ。中へどうぞ」

四人が入った宝物庫の中には、様々なものが保管されていた。

まず目を引いたのは、よく扉をくぐれたなと感心するほどの巨大な絵画や彫刻品。

凡人には理解できない芸術性の爆発には、思わずあんぐりと口を開けてしまう。

そもそも芸術という分野において、優劣の定義というのは実にあやふやなものである。特に絵画などは、誰が見ても素晴らしいという写実的なものもあれば、何を描いているのかさえ分からぬ抽象的なものもあった。

「総司令官様。これ、どうやって見るんでしょうか?」

「うーむ……わしにもさっぱり分からんなあ」

今、少女と総司令官が見上げている絵画はまさに後者であった。何しろ、適当に絵の具をぶちまけたような混沌としたキャンバスに、黒い丸が一つ描かれているだけなのだ。

「作品タイトル『クマ』」という、先代の東の公爵が記したと思しきメモが額縁に挟まっているので、おそらくクマをモデルに描かれた絵なのである。しかし素人の目には、正直どちらが上でどちらが下なのかさえ判断がつかない。

「こう見るんでしょうか?」

「いや、こうじゃないか?」

少女と総司令官は一人して、首を縦にしたり横にしたりしながら、ああでもないこうでもないと言い合つた。

「ふつ……妃殿下、父上、何やつてるんですか……」

そんな二人の様子がよほど可笑しかつたのか、後ろで参謀長が噴き出した。いつも無表情の彼には珍しいことだ。

宝物庫の中には他にも、宝石をちりばめた茶器や銀のバラ水入れ、象嵌細工の宝石箱、黄金に縁取られた姿見など、滅多に見られない豪華な品々が並べられていた。

その最たるもののが、少女の目にとまる。

「わあ、すごいですね、これ! ……揺りかご、ですか?」

宝物庫の隅に置かれていたのは、眩いばかりの黄金の揺りかごであつた。金の地に、彫金と宝石の象嵌が施されている贅を尽くした逸品。

それを眺めて感嘆の声を上げた少女に、南の公爵が解説する。

「ああ、これは、皇帝陛下がお生まれになつた時に皇太后陛下のお父上から贈られたものですよ。皇太后陛下の祖国である金の国では、第一子が生まれると揺りかごを贈る習慣があるそうです」「金の国、というのですか?」

「はい。最北の連邦国の中となつた国です。現在の連邦国王は皇太后陛下の甥君で、元は金の国の

王族であらせられます

「そうなんですか……」

大陸の最も北に位置する山脈の向こうには、かつて三つの国が存在していた。

ところが、十八年前にその三国間で戦争が勃発^{ぼつぱつ}。その際、帝国の介入によつて皇太后の祖国である金の国が勝利したのだと言つた。

現在、最北の三国は統合されて連邦国を名乗り、帝国とも大変友好的な関係にある。

少女は南の公爵の授業で聞いた連邦国の歴史を思い出しながら、黄金の揺りかごをそつと揺らした。

ギッギッと、重い音を立てて揺りかごが揺れる。その度に、表面に埋め込まれた宝石が煌めき、目がちかちかしてしまう。表面を覆う黄金の輝きも、はつきり言つて目に優しくない。

「この揺りかごの中では、あまり落ち着いて眠れなさそうですね」

「そういえば、赤子の陛下も最初はこれに寝かされて、ギャンギャン泣いてらつしゃつたなー」

苦笑する少女の傍らで、総司令官は「懐かしい」と言つて笑う。

結局、黄金の揺りかごはほとんど使われないまま、宝物庫へと追いやられてしまつたらしい。

「こんな派手なだけのガラクタを送りつけやがつて、と皇太后様がお父上相手に憤慨^{ふんがい}していらっしゃつたなあ」

総司令官は顎髭^{あごひげ}を撫^{なな}でながらそう言つて、昔を懐かしんだ。

彼が半生を捧げた先帝と、その妻である皇太后は、現在最北の連邦国にて隠居生活を送つてゐる。

そんな二人も、皇帝の結婚式の十日前には帝国に戻つてくることになつてゐる。

「陛下のお父様とお母様にお会いできるの、楽しみです」

少女は黄金の揺りかごの縁を撫でながら、そう言つて無邪気に微笑んだ。

ところが総司令官は、参謀長と顔を見合わせて、少しだけ困った表情をして言つた。

「楽しみにするのは結構だがな、嬢ちゃん。あの二人はなかなかの曲者だからな……覚悟しておいた方がいいぞ?」

「まあ」

その忠告に、少女は両目をぱちくりさせた。

「——つ、痛つ……」

うららかな午後の皇妃の宮に、突然小さな悲鳴が上がった。その悲鳴の発信源である少女は、とつさに人差し指を口に含んだ。口の中に、じわりと鉄の味が広がる。

「大丈夫ですか？　あなた、本当に不器用ですね」

隣から少女の顔を覗き込んでそう言つたのは、宰相だった。

二人は今、ソファに横並びで座り、少女が結婚式で着けるベールに刺繡を施していた。

帝国では、ベールには花嫁自身が刺繡を施すという習慣がある。少女も例にもれず、刺繡が得意な宰相に教えてもらひながら、明るい緑色の葛くつや赤や黄色の小花をベールの縁えんにあしらつているところだ。

なのに途中、幾重にも縫い重ねた部分に針先が引っ掛かり、通りにくくなつた。針を一旦引いて場所をはずらせばいいものを、ついつい強引に押し進めようとしたために、手元が狂つて指先を突いてしまつたのだ。

「あんたさあ……不器用なくせに、昔から思い切りだけはいいのよねえ……」

呆れたようにそう言つたのは、少女の傍らに立つていた侍女だ。顎のラインで切り揃えた髪は栗色、瞳は緑色と、少女とよく似た色合をしている。

彼女は実は少女と同郷の幼馴染で、優秀な女密偵でもあつた。今は、少女の護衛のために侍女に扮して皇妃の宮で働いている。

少女の祖国の前国王と王太子は、半年ほど前、帝国に反旗を翻ひるがえそうとして失脚した。

新しく国王となつたのは、密偵時代の少女のボスでもあつた第二王子。

妾腹しょくふくであるがゆえに冷遇されていた彼は、部下であつた少女が帝国皇帝陛下に見みそ初められたことで、帝国との間に個人的なパイプを手に入れた。そして、帝国皇帝陛下に忠誠を誓うことにより父や兄と決別し、見事彼らに対するクーデターを成功させたのだった。

現在、帝国と少女の祖国の関係はすこぶる良好。少女の幼馴染も、出向という形で帝国諜報部の長である西の公爵の下に就いている。ちなみに皇妃の宮に仕える他の侍女達には、少女の乳兄弟と紹介されていた。

「いつか大きな怪我をしないかって、親父様もいつも心配なさつてるわよ。気を付けなさい」

「はい、ねえ様……」

普段は侍女らしく丁寧な言葉遣いで少女に接するが、今二人の近くにいるのは宰相だけ。事情を知っている者しかいない場面では、少女の幼馴染は元來の蓮はすつ葉な口調になる。それが気に入らぬいらしい侍女頭にはいつも睨まれるが、彼女はどこ吹く風という態だ。

「痛いです……」

少女は血が滲む指を見下ろして、自分の不甲斐なさにしょんぼりと肩を落とす。
それを見た宰相は苦笑を浮かべつつ、優しい声で言つた。

「世話の焼けるお嬢さんですね。どれ、手を見せてごらんなさい」

「すみません、宰相様……」

少女は言われるままに、針で突いた人差し指を宰相の方へと差し出した。

宰相は、男性にしては華奢な指をそれに添わせて、傷口を検分する。

「ああ、これくらい。舐めておけば大丈夫ですよ」

彼はそう言つて、あろうことかブクリと血玉の浮き上がった少女の指を口に含もうとした。

少女も幼馴染も、さすがにぎよっとする。

と、その時、バンッと乱暴に扉を開く音が響いた。

「——ちょっと、待てっ!!」

少女は驚いて、声がした扉へと顔を向ける。

そこに立っていたのは、長い亞麻色の髪に大きな白い布をかぶつた商人風の男だった。

少女は翡翠色の両目をぱちくりさせると、隣に座つた宰相に問いかけた。

「あの……、どちら様でしようか?」

「……おい……」

少女の言葉に、男はがっくりと項垂れる。

一方、宰相は慌てた様子も無く、扉の脇に控えていた近衛兵達に向かつて告げた。

「あなた達、何をしているんです。早くこの怪しい男を皇妃の宮から摘み出しなさい」
そんな宰相の言葉に、近衛兵達はたいそう困った顔をする。何故なら……
「誰が怪しい男だ。分かつていて言つているのだろう」

「はて?」

宰相はとぼけるように首をかしげて見せた。

男の風貌は少女には見覚えのないものだつたが、その声にはおおいに聞き覚えがあつた。
少女は針で突いた指先の痛みも忘れ、ズカズカと大股で近づいてきた男の顔を見上げた。

「へ、陛下……?」

商人風の男の正体は、なんと皇帝陛下だつたのだ。

皇帝はカツラを被つた頭をさらに布で覆い、黒い縄状の輪で留めている。

クーフィーヤと呼ばれるその被り物は、帝国や周辺の内陸部の国々においては、主に商人の男性が帽子代わりとして着用している。元々は、砂漠を行く商人達が強い日差しや砂嵐から顔を守る目的で着用していたものだ。

皇帝は、本日の政務を全て片付け、少女と過ごす時間を確保してきたと話す。続けて両目をぱちくりさせる少女に、「街へ行くぞ」と告げた。

「街、ですか?」

「ああ、この一年、外を自由に歩かせてやることもできなかつたからな。今日は、お前の行きたいところへ連れていくつてやるぞ」

皇帝の言葉を聞いて、少女はぱつと顔を輝かせそうになつた。

しかし、手に持つていた針と糸の存在に、すぐさま自分の現状を思い出す。

「あの、でも刺繡がまだ途中で……」

忙しい宰相が、わざわざ時間を作つて刺繡を教えに来ててくれたのだ。優先すべきは皇帝であるが、だからと言つて宰相の厚意を無下にできようはずもない。

少女はおろおろして、目の前に立つた皇帝と、隣に座つた宰相の顔を見比べる。

すると宰相が苦笑を浮かべ、彼女の手から針と糸を取り上げた。

「刺繡は私の趣味ですから、気になさらずともよろしい。お茶を飲むついでにキリのいいところまでやつておきますよ」

「……申し訳ありません」

「明後日には先帝夫妻も戻られますし、結婚式の前後はあなたも陛下も身動きがとれないでしょう。今のうちに羽を伸ばしていらっしゃい」

宰相の言う通り、二日後には先帝と皇太后が帝国に帰つてくる予定になつてゐる。そうなれば外出どころの話ではない。

「ありがとうございます、宰相様。行つて参ります」

宰相に背中を押され、少女は今度こそ満面の笑みを皇帝に向けた。

皇帝はそんな少女に頷くと、侍女頭を呼んで少女を着替えさせるよう命じた。

栗色の髪を黒髪のカツラで隠し、その上に大判のスカーフを頭巾のようにして被る。シンプルな

長袖ワンピースの下には、踝（あすが）できゅつとしまったズボンを穿いた。

それらは一般的な女性の普段着姿で、この日の少女はどこからどう見ても町娘。

皇帝は少女の装いを満足そうに眺めると、さつそく彼女の手を取つて皇妃の宮を出ていつた。
「やれやれ……陛下ときたら、子供のようにはしゃいで……」

そんな二人を見送つて、宰相が小さくため息をこぼす。

侍女頭はそれにくすりと笑い、宰相に紅茶を用意するため、その場を離れた。

宰相は無言で刺繡の続きを取りかかろうとする。

その時、ベールをくん、と引っ張られる感触がして、顔を上げた。

「——おや、あなた。何をするつもりです？」

侍女に扮した少女の幼馴染が、ベールの反対側を掴んでいたのだ。

「彼女は宰相の隣に腰を下ろし、少女が置いていった針と糸を手に取つた。

「私も手伝います。あの子に任せていたら、せつかくのベールが血（ちまみ）塗れになりそうですし」

「ペールの刺繡を手伝えるのは、新郎新婦の親族だけですよ。あなた、ただの幼馴染でしょう？」
身も蓋もない宰相の言い草に、少女の幼馴染はキッと睨みつけながら言い返す。

「おチビとは姉妹のようにして育つて、家族も同然の仲なんです！」

この幼馴染の両親は共に軍人で、大戦の際に命を落としていた。そのことで、当時敵対関係にあつた帝国に対しても思つて育つて、家族も同然の仲なんです！

しかしそれ以上に、無策のまま戦争に参加して両親を大死にさせた祖国の前国王を憎んでいた。

彼女が今、両親の仇とも言える帝国に仕えているのは、この国が前国王の失脚に一役買つたからである。それに……

「あの子はもう、自分の親族と容易に顔を合わせることもできないんですよ。唯一堂々と側にいるれる私が、親父様達の代わりを務めたつていいじゃないですか」

現在帝国の属国は五十余り。そのいずれから妃を娶つたとしても帝国の贔屓と取られ、不和の種となるだろう。よつて皇妃となる少女の出自は明かされず、当然親族との面会も叶わない。それでもなくとも、密偵を生業としている養父や兄達とは、会うことは難しいのだ。

口には出さないが、少女がそんな状況を寂しく思つてることを、幼馴染は知つていた。そして、宰相もそれを理解していたため、針を動かし始めた幼馴染の手を止めるることはなかつた。

「あれ……？」

王城に出入りする商人達に紛れて表門を出た少女は、いつの間にか足元を歩いていた黒い塊に気づいて目を瞬かせた。あの黒い毛並みのボスネコである。

彼は足音を立てないのももちろんのこと、容易に気配も悟らせない。その様子はまるで優秀な密偵のようだ。

「ボス？ 一緒に来るの？」

少女の問いに頷くように、ボスネコは「なーん」と愛想良く鳴く。

「何だ、お前。保護者気取りか？」

一方、からかうような皇帝の言葉には、お揃いの琥珀色の瞳を細めて「なー」と低く鳴くのだった。

さてそんなボスネコを連れ、王城の表門からまつすぐに伸びる大通りを行くと、やがて道が放射状に分かれているのが見えた。それらの通りは進むにつれあちこちで交差して、まるで巨大な迷路のようだ。

多くの人々が行き交い、両脇に立ち並ぶ店からは威勢のいい声がかかる。

このような商業地区はバザールと呼ばれ、衣類や貴金属、陶器や絨毯などの日用品から、青果、精肉、魚介類といった食料品まで、様々な商品を取り扱う店がひしめき合つてゐる。

同じような商品でも、売つている店によつて値段はまちまち。子供の玩具のようなガラクタに紛れて、目が飛び出るほど高価な宝石が売つてゐることもあるから、まつたく侮れない。

また、焼きたてのパンや串焼き肉など手軽に食べられる料理を出す屋台も多く、食欲をそそる匂いが漂つてくる。

「ふわあ……すごい人ですね！」

「迷子になるなよ」

思わず感嘆のため息をついた少女に、皇帝がおどけるように言つた。

街には物が溢れていた。そしてそこに生きる人々は、誰しも顔を生き生きとさせている。

彼らに平和な日常を与え、その豊かな生活を守つてゐるのは、皇帝である。皇帝が正しく国を動かしているからこそ、人々は穏やかな毎日を送ることができるのだ。

それを退屈と言う者もいるが、成人前から戦の最前線に立ち、平和の尊さを身を以つて知つてゐる皇帝には、大陸にこれ以上血を吸わせる氣はない。そのために、帝国はどの国よりも強く、そして寛大であらねばならない、と常々思つていた。

その強さと寛大さに引かれ、帝国には多くの人間が集まり、様々な物も集まつてくる。珍しい物が集まれば、それを買い求める人間も集まり、街はどんどん活気を増していく。

バザールは、まさに帝国の豊かさと平和の象徴であった。

それをしばし無言で眺めていた皇帝は、隣を歩く少女に向かつて顔を綻ばせた。

「民の顔を見ていると、自分は間違つていないと思えてほつとする」

「はい、へい——あつ……」

少女は微笑みを返しつつ、陛下、と言いかけ、慌てて両手で口を塞ぐ。せつかく変装をしているのであるから、呼び方にも気を付けねばならない。

皇帝は最初、互いを名前で呼び合うことを提案したが、それはどうにも恐れ多いと思つた少女は、別の呼び名を考えていた。

「えつと、だんな、様……」

ケーフィーヤと長衣を身にまとつた皇帝は、眼光の鋭さもあってやり手の商人に見える。町娘仕様の少女はその恋人という設定だったが、本人としては侍女と言われる方がしつくりきた。そのため「だんな様」と呼ぶことにしたが、きっと傍目には違和感がないだろう。

ちなみに参謀長などは最初、街に出るなら少女には男の格好をさせるべきだと主張していた。帝

国の城下街は治安がよく、女性が一人で出歩くのにもさして問題はないが、突発的な犯罪に巻き込まれる可能性はどうしても女性の方が高い。

しかし、皇帝が譲らなかつた。せつかく初めて一人で出掛けられるのに、男装などさせては堂々と手も繋げない、と言うのだ。参謀長はその言い分に呆れたような顔をしたもの、最終的には皇帝の意思に従つた。

そして現在、やはり心配だからということで彼も一般人に変装し、少し離れた場所から護衛に当たつてゐる。

皇帝は、少女の頬に掛かった偽物の黒髪を除けてやりながら尋ねた。

「どこか、行きたいところはあるか？」

皇帝は皇太子時代、視察もかねて何度も街に降りていた。その頃は宰相や参謀長と三人で、裏路地を探検して歩いたこともあると言う。少女の方も、密偵時代は街の一角にあるアジトで一年ほど実際に生活していたので、そこそこ道に詳しい。

「えつと、えつと……」

忙しい皇帝が、せつかく自分のためにくれた貴重な時間をどう有効活用すべきか。

少女は頭の中で街の地図を広げて唸る。

その様子にくすりと笑つた皇帝は、ゆっくり悩んでいいと告げると、少女の片手を取つて歩き始めた。

彼はまず自分の用事を済ますべく、老舗の文具屋を訪ねることにした。一日中ペンを握り締めて

いることが多いため、いつも自分で手に馴染むものを選んでいるのだ。

「お前も何か欲しいものはないか？一緒に買ってやるぞ」

「え？ ええつと……」

文具店に入り、早速ある品に目をつけた皇帝は、店主と値段交渉を始めた。バザールでの買い物は值切って当たり前。定価はないに等しく、店主と客の駆け引きで値段が決まる。

店主と舌戦を繰り広げる皇帝に面食らいながら、少女も店内を眺めて回る。

そんな中、ふと少女は誰かに見つめられているような感覚を覚えた。

ぱつと顔を上げて辺りを見回す。さらに、店先まで出てみた。

しかしこの時にはもう、視線は感じられなくなっていた。

気のせいだったろうかと思いつつ、少女はくるりと店の方を振り返る。

「わっ……!?」

とたんに彼女は両目を見開き、驚きの声を上げた。というのも、店の入り口の太い梁の上から、大きな目玉がぎょろりとこちらを見つめていたからだ。

青いガラス玉に、白と黒の絵の具でまん丸い目玉が描かれている。先ほど皇帝に連れられて店に入った時には気づかなかつた。見たところ、飾りというよりは何かのまじないといった雰囲気である。

（まさか、さつきの視線はこの目玉の仕業、なんてことは……）

少女は青いガラスの目玉を見上げつつ、ついついそんな非現実的なことを考えてしまつた。

と、その時。

通りに背を向けて立つていた少女の近くを、ふわりとバラのような香りがかすめた。

振り返つて見ると、背後を通り過ぎたのはすらりと背の高い人だつた。くろねこ 踊まで隠す濃紺のワンピースを纏い、頭から背中にかけてを黒いベールが覆つていて。

何故か興味を引かれ、少女はその後ろ姿を目で追つた。

すると、通りの向こうから歩いてきた若い男が、すれ違ざま 様に黒いベールの人にぶつかつた。

「——！」

少女の視線が一瞬鋭く煌めく。

彼女は通りを行き交う人々の波に紛れ込むと、自分の方に歩いてきたその若い男に近づいた。そして、やはりすれ違い様に、わざと軽くぶつかる。

「あつ、ごめんなさい」

「いや、こつちこそ」

少女がにつこりと微笑んで謝ると、若い男は愛想良く答えて去つて行つた。

それを見届けた少女は、今度は慌てて黒いベールの人を追いかけ、呼び止める。

「——あの、すみません！ これ、落としませんでしたか？」

「あら……」

先ほどの若い男は、実はスリだつた。彼が黒いベールの人から財布をすつたのを目撃した少女は、それをさらにつつて取り返したのだ。

大帝国の皇妃となる者が自慢できることではないが、元密偵という職業柄、少女はスリの訓練も受けていた。手先は決して器用とは言えないものの、養父も舌を巻くその思い切りの良さのおかげで、これまで失敗したことはない。

財布の持ち主である黒いベールの人は、西の公爵と同じくらいの年頃の美しい女性だった。白と見紛うほどのプラチナブロンドと、透けるような白い肌。帝国内ではあまり見ることのない随分と色素の薄い人だ。おそらく黒いベールは、陽の光の刺激を受けやすい肌を保護するためのものなのだろう。

女性はしばしの間、淡い青の瞳で少女の顔をじっと見つめていたが、やがて紅の載った唇の端を持ち上げた。

「わたくしのものに間違いないわ。どうもありがとう」

「いいえ。気づいてよかったです」

少女はにつこり微笑み返すと、財布を彼女に返した。その時、ちょうど文具屋から出てきた皇帝が、きょろきょろと自分を探しているのに気づく。

「それでは、失礼します」

少女はそう告げてペコリと頭を下げるが、皇帝の方へと駆け戻る。

その後ろ姿を、黒いベールの女性はしばらくじっと見つめていた。

バザールには同業者が集まっている地区もあった。

中でも、香辛料を取り扱う一角はスペイスバザールと呼ばれている。

唐辛子や胡椒 肉料理に欠かせないオレガノやクミンなどといった様々な香辛料が店先に並ぶ。また、ナツツやドライフルーツといった乾物を同時に取り扱っている店も多い。

そんなスペイスバザールの中には、コーヒーを売っている店もあった。

焙煎した豆や、それを挽いて粉にしたものを持った袋に詰めて販売するかたわら、淹れたてのコーヒーを提供するカフェスペースも併設されている。少女は、皇帝をそのコーヒー店へと誘った。

「だんな様。ここのお代は、私に支払わせてくださいね」「うん？」

席に着いて二人分のコーヒーを注文すると、少女は懐から財布を取り出して皇帝の前に掲げた。ポーチの形をした布製の財布は、少女が長年使ってきたものだ。

皇妃候補として城に住み始めた頃は、その財布にはほとんどお金は入っていなかった。しかし、ある朝彼女が自覚めると、ベッドの脇のテーブルに見覚えのある麻袋が置かれていたのだ。

中身は、少女が密偵時代にこつこつと貯めていたお金。たいした金額ではないが、彼女にとつては自由に使える唯一の財産だった。アジトに保管していたそれを、きっと養父が気を利かせて届けてくれたのだろう。

「衣食住全て面倒を見ていただいて、何もご恩返しできませんもの。せつかくですから、今日はご馳走させてください！」

「衣食住の面倒つて……夫婦になるのだから、当然だろう？ お前、そんなこと気にしていたの

か？」

「天井にいる時だつて、いろんな物をいただきました。ずっと、お礼をしたかつたんです」大真面目に訴える少女に、皇帝は呆れたような顔をするものの、こうして真剣に言い募られては折れずにはいられなかつた。

「……分かつた。では、ご馳走になろう」「はいっ！」

少女はぱつと顔を輝かせ、嬉しそうに頷いた。

さてさて、一言にコーヒーと言つても、淹れ方によつて味わいは千差万別である。

この店のコーヒーは、まずジエズベと呼ばれるひしやくの形をした小鍋に、水と極めて細かく挽ひいたコーヒーフの粉、それからたっぷりの砂糖を入れて火にかける。

弱火で沸騰させ、泡が出てきたところで、それをスプーンで掬つて小さめのカップに入れていく。さらに強火で沸騰させて、最後に先ほどのカップに移して出来上がり。

コーヒーの粉を漉さないので、それが一通り沈むのを待つてから泡の載つた上澄みだけをいただく。

「甘い……」

一口目を飲んだ皇帝の感想はこれだつた。

城で出されるのは紅茶ばかりなので、彼はコーヒーを飲み慣れていない。ましてや砂糖をたっぷり溶かし込んだものなど、大人になるとあまり口にする機会がないものだ。

しかしその味わいはまんざらでもなく、皇帝は一口三口と続けてコーヒーを飲んだ。
少女はその様子にふふ、と微笑んで、自分もカップを傾ける。
彼女は実は、密偵時代に一度だけ、この店に足を運んだことがあつた。そんな風に少女のようない女性客がここを訪れるのには、コーヒーを味わうこととはまた別の目的がある。

「コーヒー占い？」

「はい。すごく、当たるらしいんです」

コーヒーを飲み終えた二人は、コーヒーの粉が泥のように沈殿したカップを、ソーサーの上でひっくり返した。このまま、底が冷えるまでしばらく待つのだ。そうして、カップの底に残つた粉の模様で飲んだ者の運勢を占うのが、コーヒー占いである。

以前、少女がこの店を訪れた時、カップの底に現れたのは蜂の模様だった。占い師には、新しい友達ができるという暗示だ、と告げられた。

そして、その日の帰り道、少女は野犬に噛まれて瀕死の状態でいた黒ネコに遭遇した。

黒ネコの姿を見つけた時、密偵としてアジトに隠れ住む自分が面倒を見られるだろうか、と一瞬迷つた。しかし、結局そのまま放置することなどできず、彼を抱いて連れ帰つたのだ。

そんな黒ネコは、今や皇妃の宮を牛耳るボスネコとなり、少女が引き取つた子グマの父親代わりを務めるなど、いろいろと助けてくれている。彼が占い師の言った“新しい友達”だつたとすれば、あの時の占いは当たつていた。

当の黒ネコは、コーヒーの香りは苦手なのか、今は店の前の石階段に腰を下ろして休んでいる。

「お二人様、奥へどうぞ」

頃合いを見計らって、店員が声をかけてきた。

「占いは、信じない主義なんだが」

「でも、ここ占いはよく当たるつて評判なんですよ」

あまり乗り気ではなさそな皇帝を引っ張つて、少女はカフェスペースの奥の小部屋へと移動する。もちろん、先ほどひっくり返したカップも持つていく。

小部屋の扉を開くと、すぐに小さなテーブルと椅子があつて、奥側にはふくよかな老婆がじつりと腰を下ろしていた。彼女が、このコーヒー店お抱えの占い師である。

「おやおや、いらっしゃい。恋人同士でおいでかねえ」

親しげに声をかけてきた占い師に、少女は慌ててぺこりと頭を下げた。

「こんにちは、よろしくお願ひします」

「……どうも」

皇帝も、占い師が自分達を恋人と言つたのに気を良くしたのか、話を聞く気になつたようだ。

占い師に勧められ、二人は扉に背を向けた形で並んで椅子に座る。

まず、皇帝のカップをひっくり返して覗き込んだ占い師は、ほほ、と軽快な笑い声を漏らした。

「これは、鎖くさりの模様だねえ。商売人としては、なかなか良い兆候だよ」

「鎖？」

「結婚や商売といった法的な契約を結ぶ、と出でるのをお」

「結婚、か……」

確かに、皇帝はもう間もなく結婚することになつてゐるので、間違いではない。

一方、その結婚相手である少女の方はどうと……

「おやあ……これは、ナイフかのお」

「ナイフ、ですか？」

きよとんとする少女のカップを再度覗き込み、占い師は少しだけ顔を曇らせた。

「ナイフの模様が出るのは、敵の策略があるから注意せよ、という暗示だよ」

「——敵だと!?」

少女に告げられた凶相に、本人よりも皇帝の方が鋭く反応した。

「敵とは、誰のことだ？ 策略とは、いつたい何なんだ！」

占いは信じない主義だと言つていた皇帝がガタリと大きな音を立てて立ち上がり、占い師に詰め寄る。しかし、占い師は「さあてねえ」と苦笑すると、椅子の背にゆつたりと身体を預けて言つた。

「どんな善人であろうと、生きていれば敵が現れてくるものだよ。己おのれのあずかり知らぬところで買ってしまう恨みもあるしねえ」

「誰かが、彼女を恨んでいると？」それで、彼女に対して何かを企んでいると言うのか？」

「その可能性がある、と占いには出でているねえ。まあ、悪いことが起きないように、お前さんが

しっかりと守つてあげえな」

「——言われなくても、そのつもりだ」

立ち読みサンプルはここまで